赤平コミュニティガイドクラブ「TANtan（たんたん）」

空知の炭鉱関連施設と生活文化

元炭鉱マンのわかりやすく、かつ臨場感あふれる説明に引き込まれる子どもたち。2005年9月に、赤平市・赤平青年会議所・Tantanが協働で、赤平市と近隣の小学生と親を対象に、一日だけの「カルチャーパーク」を開園。会場は、炭鉱施設とその周辺

おもてなしの心豊かに、炭鉱遺産をボランティアガイド。

ただ説明するのではなく心まで伝わるガイドを

赤平コミュニティガイドクラブ『TANtan（たんたん）』は、旧産炭地・赤平市で炭鉱遺産を紹介するボランティアガイドクラブ。炭鉱の歴史をまちのPRにつなげたいと、2005年5月に発足された。

メンバーは、94年の閉山まで住友赤平炭鉱で働き、炭鉱人生25年という三上秀雄氏を代表に、総勢15名。その面々は、公務員や会社員などいろいろだが、誰もが「炭鉱遺産説明ボランティア養成講座」の修了生。炭鉱の知識や機械の仕組みを講座で学び終えた今も、分かりやすいガイド・親しまれるガイドをめざし、掘進機や採炭機などの機械知識を深めたりしている。

講師を務めた元炭鉱マンの山口政美氏は、「講座は7回にわたり行いましたが、終始強調したのが、一方的に説明するのではなく、お客様に対して、〝おもてなしの心〟を持つこと。そして、双方向の関係を大切にするコミュニティガイドを心がけることでした」と話す。

その教えは、しっかりと修了生に伝わっているようだ。メンバーのひとりである植夢楽（うえむら）まみさんは、こんなことを言っていた。

「うれしいことに、見学者の方が、年々増えているんです。これからはもっと、お年寄り、お子さん、一人ひとりに沿ったおもてなしの表現方法を考えていきたいですね」

自分のしてきたことを外の世界に伝えられるのがとても嬉しい

ガイドの面々もいろいろであれば、ここに訪れる人の面々もいろいろのようだ。

昔、炭鉱で働いていた人が懐かしみ訪れることあり、私も子どもも炭鉱は初めてと目を輝かせる親子あり、祖父が働いていたと興味津々の様子で足を進める青年あり。本州からの訪問者も多いという。

「立坑の建物が、なんとも粋と熱心に写真を撮られる方もいらっしゃいました」と、嬉しそうに話すのは、植夢楽ガイド。そして、こんなエピソードも教えてくれた。

「メンバーの中に、元炭鉱マンの方がいるんですけど、自分がこれまでしてきた仕事を外に向かって話しているのが不思議に思う。それと同時に、とても嬉しいと、ぽつりと言ったんです。私はそれを聞いた時、〝たんたん〟が結成されて、本当に良かったと思いました」

炭鉱遺産に惹きつけられて、赤平に足を運ぶ人々がいる。まちの宝をガイドしながら喜びを味わう人がいる。かつて、まちを賑わせた炭鉱は、いま再び、まちを育み、人の心を豊かにしている。